74 期リレーエッセイ

1年後の自分を想像して

会員　森本 真唯

2022年4月，コロナ禍の影響により，3か月遅れで二回試験を通過し，修習を終えた私は，晴れて弁護士としての一歩を踏み出した。晴れて，と言っても心は晴れなかった。というのも，弁護士を名乗れる資格を手に入れただけで，何をすればいいのか全くわからなかったからである。

挨拶を行い，事務所内の手続や説明が終わり，いざ業務に入ることになる。まずは先輩弁護士の事件に共同で入れてもらうことになり，仕事を頼まれたときは，出来ないなりに理解しよう，ちゃんとした仕事をしようと奮闘する。しかし，その次の動き，見通しがわからない。記録の中で重要な部分がわからず，先輩弁護士との打ち合わせの際に思い出せない。先輩弁護士はみな，最初は何も出来ないのが普通なのだと励ましてくれるが，とはいえ何をやるにしても時間がかかり，何も役に立たない状態（更にいえば，様々なミスをしてマイナスである）が続くのは精神的にかなり苦痛だった。

現在，事務所に入所してようやく3か月が経過したところである。まだまだ失敗もするし，わからないことだらけである。にもかかわらず，コロナ禍で司法試験，司法修習が数か月遅れた74期からすると，もう5か月もしないうちに，今度は下の期が入所してくるのである。1期上の先輩として，どのような姿を見せられるか，今後自分がどんな弁護士になりたいのか，日々慣れない仕事に忙殺される中で，考えるにはあまりにも短い期間である。日々の仕事を一歩ずつ着実に進めていくことが成長につながるのだとは理解しつつも，やはり不安は大きい。一方，1年目の不安というものは，今後は経験しえないものであると好意的に考えることも出来る。一つの事件に沢山時間をかけて，不安と向き合いながら考えることが出来るのも今だけかもしれない。立派な弁護士になっている未来はまだ見えないが，今より少しだけ仕事が出来るようになった「1年後の自分」を想像しながら，日々の不安と戦っていきたい。

さて，原稿の依頼を受けた際，新人弁護士として感じた，わからないということをそのまま書いてよいと言われ，思いつくままに不安であることを書き連ねてみたが，悲観的な話ばかり書いていても虚しいので，嬉しいこともちろんあるという話で締めたい。

原稿執筆時の2022年8月においては，新型コロナウイルスが登場した2020年当時に比べれば，厳密な外出自粛要請もされなくなった。ワクチンも複数回打つことが出来，少しずつコロナとの共生が出来るようになってきた。司法試験合格後のお祝いや，修習生として同期との親睦のための飲み会がなくなってしまったのは非常に残念だったが，その代わりに弁護士として様々なところで少しずつ親睦を深めることが出来ている。今回の執筆依頼もその縁で受けたものだが，自分一人ではそのような執筆の機会もなかっただろうし，貴重な経験であった。また，孤独な弁護士業務の中，上記のような不安などを相談出来る同期，先輩方がいるのは大変ありがたい。今後も，出来たつながりを大事にしつつ，目の前の不安を解消しながら頑張っていこうと思う。